

(技術名) 茶極早生品種「静 - 印雑 131」の更新処理を組み込んだ多回数収穫技術							
(要約) 茶極早生品種「静 - 印雑 131」の更新処理を組み入れた多回数収穫法は、品質低下を生じることなく年間6回の収穫を可能とし、慣行法に比べて年間収量が増加するとともに、複数年処理を継続しても樹勢低下を生じない。							
沖縄県農業研究センター名護支所 作物園芸班					連絡先	0980-52-2811	
部会名	作物	専門	栽培	対象	茶	分類	指導
普及対象地域							

[背景・ねらい]

沖縄で極早生品種の「静 - 印雑 131」を栽培すると、冬季も生育を停止せず、秋整枝期を前進させることで一番茶の収穫期を顕著に早められる。一番茶が早まり生育期間が延伸すれば年間の収穫回数を増やせるものの、収穫回数を増やすと枝が細く、光合成能力の低下した貧弱な葉が多くなり、樹勢の低下を招く心配がある。そこで、二番茶もしくは三番茶の収穫後に更新処理(図1)を行って年内に更新効果を得る方法を試み、沖縄の「静 - 印雑 131」に適した年間栽培体系を確立する。

[成果の内容・特徴]

1. 更新法(二茶後更新法、三茶後更新法)では、慣行法に比べて一番茶の収穫期が8日早まり、6回収穫でき、年間収量が慣行法に比べて19~35%増加する(表1、2)。
2. 更新法は、年間収穫法に比べて更新後に得られる茶のアミノ酸含有率が高く、カテキン含有率が低い(図2、3)。
3. 更新処理は複数年(2007~2009年)継続しても樹勢が低下せず、収量および品質向上効果が持続する。

[成果の活用面・留意点]

1. 栽培指導用資料として活用する。
2. 本技術は、一番茶の早期収穫により生育期間の延伸がはかれる「静 - 印雑 131」のみで活用可能な技術であり、他品種には適用出来ない。

[具体的データ]

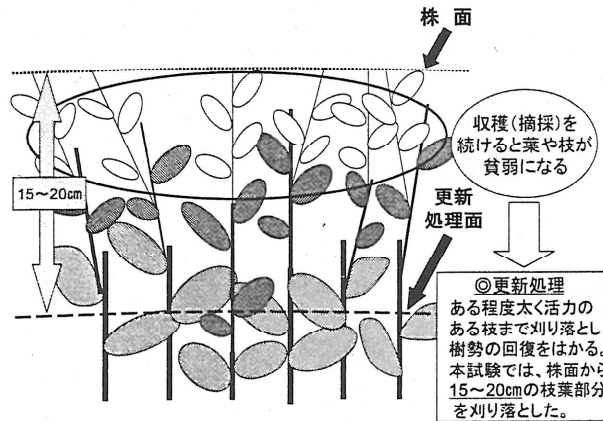


図1. 更新処理について

表1. 更新法が「静-印雑131」の収穫期に与える効果 (2009年: 継続処理3年目)

処理方法	秋整枝期	収穫期(月/日)					
		一番茶	二番茶	三番茶	四番茶	五番茶	六番茶
二茶後更新法	12/15	2/26	4/17	6/22	7/23	8/24	9/30
三茶後更新法	12/15	2/26	4/17	6/1	7/28	8/25	9/28
年間収穫法	12/15	2/26	4/17	6/1	7/6	8/10	9/14
慣行法	1/5	3/6	4/21	6/5	7/10		

表2. 更新法が「静-印雑131」の収量に与える効果 (2009年: 継続処理3年目)

処理方法	生葉収量(t/ha)						年間収量
	一番茶	二番茶	三番茶	四番茶	五番茶	六番茶	
二茶後更新法	2.8	5.7	2.7b	7.0a	3.1	2.7	24.0a
三茶後更新法	2.3	5.2	6.7a	3.2b	3.6	3.2	24.2a
年間収穫法	2.3	6.2	6.9a	5.8a	3.6	2.3	27.1a
慣行法	3.0	4.8	6.5a	5.8a			20.1b

- 1) ①更新法: 二番茶後あるいは三番茶後に更新処理を実施
- ②年間収穫法: 更新を行わず年間を通して収穫を実施
- ③慣行法: 更新を行わず四番茶まで収穫を実施
- 2) 更新処理時期: 二茶後更新法4/18、三茶後更新法6/2
- 3) 秋整枝は一番茶前に実施し、秋整枝により切断された茎の側芽が一番茶芽となる

有意差 n.s. n.s. * * n.s. n.s. *

1) 表中の値に付した異符号間には5%水準でTukey-HSD法による有意差がある

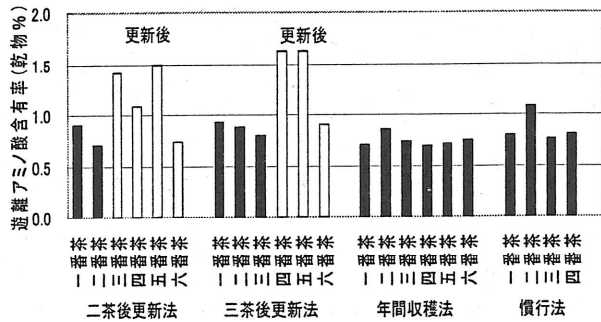


図2. 更新法が「静-印雑131」の遊離アミノ酸含有率に与える効果 (2009年: 継続処理3年目)

*遊離アミノ酸含有率はアスパラギン酸、グルタミン酸、セリン、グルタミン、アルギニン、テアニンの合計値

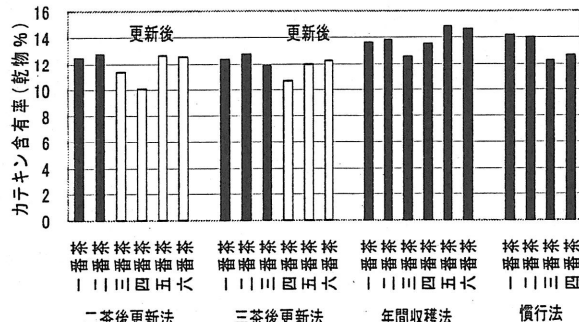


図3. 更新法が「静-印雑131」のカテキン含有率に与える効果 (2009年: 継続処理3年目)

*カテキン含有率はエピガロカテキン、エピカテキン、エピガロカテキンガレート、エピカテキンガレートの合計値

[その他]

研究課題名: 温暖化適応性の高い茶品種の周年安定生産体系の現地実証
 予算区分: 受託 ((独) 野菜茶業研究所、農林水産省委託プロジェクト「地球温暖化が農林水産業に及ぼす影響評価と緩和及び適応技術の開発」)
 研究期間: 2008 ~ 2009年度
 研究担当者: 平松紀士、田中洋貴、赤嶺伸一
 発表論文等: 「地球温暖化が農林水産業に及ぼす影響評価と緩和及び適応技術の開発」成果報告集